



人造魔法少女

カタリナ

めぎ

人造魔法少女カタリナ

めぎ

現代から少し先、未来の世界。

「怪異」と呼ばれるモノが現れ始めた。

人の影のような姿をしたそれは物理的な攻撃では傷つかず、人を襲う。

かつて妖怪、怪物と言われていたそれらは何がきっかけだったのか、度々世界各地で大量発生が起こるようになっていった。

銃器も通用しない怪異に人類は対抗する術もなく、暴風雨に対する様にただ怪異が過ぎ去ることを待つことしかできなかった。

その最中、伝承を元に世界で見つかった幾つかの遺跡から発掘された未知の技術「魔力炉」。

10cm程度のサイズから莫大なエネルギーを生み出すだけではなく、魔力という人類が失った力をも操ることができる遺物。

それこそ人類が怪異に対抗する、唯一の手段となるものだった、しかし。

研究調査の結果、魔力炉を自在に使用するためにはある種の女性型アンドロイドの動力源として使用する以外無いことが判明する。

かくして、発掘された魔力炉を組み込まれたアンドロイド、「人造魔法少女」が誕生した。

これはとある人造魔法少女と少年の物語。

日本のとある市街地。

休日の駅前是人混みでごった返していた。

だが、人々が持つスマホから一斉にアラームが鳴り始め、同時にサイレンの音がスピーカーから鳴り響く。

『当地区に緊急怪異警報が発令されました。直ちに当該地区よりの避難を開始してください』

一瞬、しんと静まり返った直後、叫びとともに人ごみが駆け出す。

『繰り返します、当地区に緊急怪異警報が発令されました。直ちに当該地区よりの避難を開始してください』

スピーカーが設けられている駅前ロータリーの噴水。

その水の中から黒いモヤのようなものが湧き出し、やがてそれは何体もの形を成していく。

大きさは子供程度の猫背をとった人の影のような姿に相貌だけが爛々と輝いている。

「怪異」と呼ばれるモノ。無差別に人々を襲う災厄。

「っ！ 怪異だ！！」

誰かが叫んだ声に続けて悲鳴が上がる。

その悲鳴に呼応するかのように怪異達は虚ろな瞳を向けるとゆっくりと列を組んで歩き出す。

パニックと化した群衆、その中で一人の女性が転んでしまう。

幸い、群衆に踏み潰されることこそなかったが取り残された彼女に手を貸すものもおらず、怪異達は無感情な瞳を彼に向ける。

「ひっ……！」

彼女は怪異と実際に遭遇したのは始めてであったが、その恐ろしさは近年のニュースで何度も見ていた。

怪異に触れられただけで人は生气を失い、間もなく死に至る。

種類によっては肉体を食い散らかすものもあるらしい。

ゆっくりと迫る死の影から彼女は這いずるように逃れようとした時。

その刹那、上空から打ち下ろされた雷に怪異が薙ぎ払われ、消滅する。

「……？」

恐る恐る顔を上げるとそこには一人、長身の少女が立っていた。

黒い衣装に身を包み、右手には身長をも超えるほど長い杖を持ち、青い長髪の上には三角帽子。

ツリ目の大人びた顔が振り向けば、口角を上げてニヤリと微笑む。

「危ないところでしたわね。歩け……そうにはないようですが。では、ここで身を縮めてじっとしててくださいな。そして御覧なさい。この人造魔法少女、カタリナの勇姿を！」

カタリナと名乗る少女は杖を構えれば、杖の先端に浮かんだ魔法陣から再び雷が打ち出され、まだ残っていた怪異が数体まとめて消滅する。

グエ、グエ、と不快な叫びをあげる怪異の口から次々に光弾が打ち出されるがカタリナは避けようとしめない。

だが、僅かに杖を動かせば薄い光の板が眼前に展開され、カタリナと女性を狙った光弾がすべて消滅する。

女性は怪異の他にもうひとつ、報道されていた内容を思い出す。

警察も自衛隊にも対処できない怪異。

それらに対抗するため政府、環境省だったか、に造られたというアンドロイド。人造魔法少女。

アンドロイド自体は今の世の中には然程珍しくない存在ではあるが、何故人ではなくアンドロイドだけが魔法を使える存在になっているのか、そのことは明らかになっていない。



整いすぎた完全に左右対称の顔立ち、高い背丈からしても目立つ胸の大きさと容姿は、よく出来たマネキンのようにも見える。

カタリナが杖をくるくると回せば魔力の雷が次々と発射され、残った怪異を次々と駆逐していく。

最後の一体が雷撃に穿たれるとカタリナは勝利を確信したように鼻を鳴らした。

「ふん。雑魚怪異など私の前には塵芥同然ですわね。おーっほっほっほ！」

大きな胸を反らし、腰に手を当て高笑いをするカタリナ。

その姿に命が助かった安堵から少々あっけにとられる女性。

しかし、正面に揺らめく煙の中、モヤから新たな影が立ち上がってくるのに気がつく。

影は形となり先程の怪異たちよりもずっと大きい、数メートルはある巨躯が形作られている。

「あ……あ、ま、まだ……！」

黒い影は蜥蜴のような姿を形作るとその背中に光が走る。

かぶり、とカタリナ達に向かって開いた口に光が満ち。

再び恐怖に襲われた女性が見をすくめ、目を閉じる。

次の瞬間、閉じている瞼から染み渡る光。

だが、何時までたっても予想していた熱と衝撃は襲ってこない。

「……え？」

恐る恐る目を開けば、カタリナの前に光の壁がそびえ立っている。

いや、彼女が作った障壁に巨大な怪異の発した閃光がすべて防がれていた。

10秒以上、吐き出され続けた光の渦はすべてカタリナの前に霧散して。

そこで力が尽きたのか、ライターの燃料が尽きたかのように光がか細くなり、やがて消え失せれば。

「やはり雑魚の親玉は雑魚ですわね……。くらいなさいまし！ おーっほっほっほ！」

再びの高笑いとともにカタリナの杖から、先程に倍する勢いで放たれた雷撃に怪異が貫かれる。

地獄の底から響いてくるような断末魔。

そのおぞましい声が消え去った時、駅前には静寂が戻っていた。

あっけにとられたままの女性を薄い笑みを浮かべて見下ろすカタリナ。

「どうやら無事でしたわね。怪異は片付けましたし、程なく救援がくるでしょう。歩けないようでしたらじっとしていれば大丈夫ですわ。それでは！」

ごきげんよう！ この人造魔法少女カタリナの活躍、お忘れなく！」
口元に手を当て、胸をそらすカタリナ。
彼女は僅かに膝を屈めると地を蹴って、そのまま空中に浮かんでいく。
やがて、その姿はビルの谷間に飲み込まれて。

「あ……」

女性は声をあげようとしたが、カタリナの姿はもうどこにもなかった。

「あれが……人造魔法少女……」

怪異と同じく、魔法少女の实在も疑っていた彼女だが目の当たりにしてしまえば信じる他ない。

それにしても。

凄まじい力を持っているのはよく解ったが、なぜ少女型のアンドロイドなのだろう。

その疑問は頭に浮かんでいたがとにかく彼女、カタリナに助けられたことだけは間違いなかった。

怪異の発生場所から数キロ離れた市街地の路地裏。

ビルの谷間に隠れるように佇む少年。

彼は少し小柄な体軀を隠すようにフードを被っている。

抱えた大きめのタブレットにアイコンが点滅した時、上空からふわりと黒い影が少年の目の前に降り立つ。

「おまたせ、薫くん。このカタリナの勇姿、どうだったかしら？」

ポーズを決めて自分より頭2つは背が低い少年に得意気に微笑むカタリナ。

だが、薫と呼ばれた少年はタブレットから目を離さない。

「……最後、反応遅れてたでしょ。もうちょっと防壁展開遅かったら危なかったよ」

「ぐ。ま、間に合ったんだからいいじゃない！」

「急いで展開したからちょっと回路にも負荷かかってるよ。わかってるでしょ」

タブレットを少し下げて顔を見つめられればカタリナがぐぬ、と僅かにたじろいで。

「……も、もう。じゃあ……わかってるでしょ。点検を……」

懇願するような表情となったカタリナにフードの奥で少年がこくと頷けば。

顔を少し赤らめたカタリナは胸を覆う衣装に手をかけ、ずらしていく。
すると、その下からは豊かな胸がこぼれ落ちる。

「ん……おねがい……」

カタリナは露になった胸を下から持ち上げるようにして揺すってみせるとゆっくりと少年の前に胸を差し出す。

少年の指がカタリナの左乳首を摘むと、そのままゆっくりと回転させる。

たわわな乳房の内部で機構部品がかちりと音を立て、カタリナの回路に信号を打ち込めば。

「び、きゅうっ！ んっ♡ メンテナンスハッチ、オープンっ……！」

かちやり、と胸の谷間、カタリナの内部からロックの外れる音が響く。

そのまま、ぷしゅう、と音を立てて左乳房が外側に開いていき、内部機構が外気にさらされる。

だが、先程カタリナが見せた戦闘能力からすればそのフレームや機構部品は脆弱とも思えるように見えた。

詳しいものが見れば、その構造は家庭用のアンドロイドと殆ど変わらぬものだと解っただろう。

「はあ、はあ……び、きゅ、ん……っ！ か、薫くん……。ぴゅ、ぎ。内部機構温度が上昇中……ん、は、早くう……」

「ちょっと待って。少し、目視点検するから」

少年の目が細かく動き、カタリナの胸部回路に損傷がないかを確認していく。

その視線を認識する度、感情の高ぶりを示すかのように胸の回路の瞬きは激しさを増して。

呼吸を模した排熱も荒くなり、少年の顔に熱い吐息がかかり始めた時、ようやく彼の指が胸の内部に滑り込みスイッチを押下する。

「ん……っ！ 増設排気ファン稼働開始……！ はあ、はあ、はあ……。も、もう。焦らさないでえ……」

開いた胸から熱気が吹き出し、内部の熱が排出されていく。

三十秒も経過すれば赤色に点滅していたアイコンが青表示に変化し、カタリナの息使いも静かに収まり始める。

「落ち着いた？ じゃあ、ハッチ閉めて家に戻ろうか」

「え、そ、そうね……え、ええと……あ、あの……薫くん、溜まってるのではないのかしら……？」

胸のハッチを開いたまま、カタリナは薫の瞳を見つめて呟き始める。

「ほ、ほら。性交してから時間も経っているし。男の子が過度に性欲を溜め

込むことは良くないのだけど？」

右の乳房に手をかけ押しつぶすように少年の顔に寄せていくが、俯いた彼は身じろぎもせず。

「昨日の夜したばかりでしょ」

「っ、そ、それはそうだけど！ その……も、もう！ 薫くんのいじわるっ！ わかってるくせに！」

戦闘時に見せた高慢な笑いはなりを潜め、泣き顔になったカタリナは力が抜けたように膝をついて。

「ぴ、きゅう……燃料残量警告、性欲値が上昇し、ま……ん、あ……♡ だ、だめ。回路負荷が……。はあ、はあ……魔力炉出力低下……。は、はやくう……燃料補給……セックス、してえ……♡ おねがい、よお……」

少年の足にすがりつき、うるんだ瞳で懇願するカタリナ。

その燃えるように輝く瞳の色と、吐息から伝わる熱に僅かに少年の顔が引きつる。

人造魔法少女、古代の遺跡から発掘されたという魔力炉を組み込まれたアンドロイド。

その魔力炉の燃料となるものは男性の精液、それも男性側に限られた素質が必要なものだった。

そしてこの少年、池波 薫は数少ないその素質を持つ人間でありカタリナのマスターである。

「もう……調子に乗って魔力消費考えないからだよ」

「だ、だってえ……だってえ……あっ！？ ね、燃料残量ゼロっ！ 燃料残量ゼロっ！ た、直ちに男性精液を補給、しし si シしてく da ささ。は、はやくうっ♡ ほ、補給、補給、をおおっ♡ 機能、ていし、しちゃうのおおっ♡ たすけてえええっ♡ セックス、せっくす、せっくす、せっくすうっ♡」

燃料残量の低下に伴いカタリナの性欲値は爆発的に増大してしまう。

人造魔法少女は人間の救世主として宣伝され、一般人にも高い人気を持っている存在だがこんな姿を見られたらその権威も地に落ちるだろう。

だが、異常値へと膨れ上がった性欲に電子頭脳を苛まれたカタリナはあられもない姿となって足を開き、衣服を脱ぎ捨てて。

無毛の艶めかしい女性器ユニットが潤滑液を吹き出し、路地裏の地面を濡らしていく。

「しょうが……ないんだから……カタリナさんは……っ！」

冷静な少年の声に隠しきれない興奮が交じる。

「し、しかたない、じゃないっ♡ わ、わたくしは、じんぞう、魔法しょう、じょ。セクスロイド、なんだからあっ♡ か、薫くんのせいえきがないと、機能停止、しちゃうの、わかってるでしょおおっ♡ い、いいからっ！ 早くうっ！ あ、あはあぁっ♡！」

カタリナの脚が少年の背中に絡みつぎ。その太ももに手が伸びて。

むき出しの肌同士が触れ合い、少年の体液、アンドロイドの潤滑液で濡れた部位同士が音を立てる。

べちゃり、と粘つく音が路地裏に響きゆっくりと少年の腰が動かされ、怒張がシリコンの塊をかき分けていけば。

女性器ユニット内部のセンサーから発した信号が左胸の回路に流れ込み、カタリナの電子頭脳に快楽信号を送り込む。

たちまちのうちに処理領域が不足した電子頭脳は加熱して、言語機能にエラーを起こす。

「びゅ、ぎ。だ、男性器挿入を確認……あ————っ♡ いいっ♡ かおるくんのおちんちん、きもちいいのおおおっ♡」

歓喜の声と共にぎゅいいい、という駆動音が響き始めて。

開いた胸の内部ではLEDがカラフルに点滅を開始して、カタリナの興奮を示している。

細い指が少年の背中に食い込み、長い脚がさらに少年の体に絡みつぐ。

息を荒くした少年がカタリナの体を突き上げればその姿勢に合わせたように動き出し。腰を引き離せば名残惜しそうにカタリナの体がしがみついてくる。

「びゅぎっ！ あ、あーっ♡ か、かヲrUくうんっ♡ ますたぁっ♡ わたくしの、ますたぁぁっ♡ すき、すき、あいしてる、のおおおっ♡ びゅ、ぎ、じょ、女性器ユニット、動作パターン変更……びゅ、ぎ、がびいいいいい————っ♡」

ぎゅいいいいい、と彼女が機械人形であることを示す音と共に女性器ユニットが少年を激しく締め上げれば。

「カタリ、ナ……さんっ……！ う、しめすぎ……も……だす、よ……っ！ う……！」

か細い呻きとともに絶頂を迎えたペニスから、精液がカタリナの体内に迸る。

今の人類科学では完全に解析できぬ魔力を秘めた白濁液がカタリナの腹部に組み込まれた機構へと吸い込まれていけば。

「あ、あ……あぁあ————っ♡ あついのがあぁ♡ わたくしの、魔力炉、

にいいいっ……！ 魔力炉、さいきどうっ♡ ん、ん……あ————っ
っ！ がび————っ♡」

停止状態だった動力部が再び起動し、カタリナは自らの身体に力がみなぎっていくことを感じていく。

空っぽの魔力炉に愛しい少年の精液が流れ込むこの瞬間、カタリナの電子頭脳は最高の幸福度に満たされて。

繋がったままの少年と機械人形。

二人は互いの熱が収まるまで無言のまま路地裏で抱きしめ合っていた。

数日後、市街の閑静な住宅街。

その一角にある家の庭、晴れ渡る空の下で一体のアンドロイドが洗濯物を干している。

長いスカートにエプロン、カチューシャとメイド服。

この時代ではそう珍しくもない姿の家庭用アンドロイド。

それこそがカタリナの普段の姿だった。

白い下着をパンパンと伸ばしてからハンガーに掛けていく。

その姿を庭に降りてきた雀がちちち、と鳴き声を上げて見つめている。

至って平和な時間が流れていく。

元々カタリナは池波家の夫婦に一人息子の薫の世話用として購入されたアンドロイドでありそれ以来十年間、本来は今日のような日々が彼女の全てだった。

それが一変したのは半年ほど前である。

突如出現した怪異により、薫の父母は死亡。

悲しみに暮れる薫とカタリナの前に現れたのは環境省怪異対策課を名乗る役人達だった。

二人は彼らから「人造魔法少女計画」のことを聞かされる。

古代遺跡から発掘された未知の遺物、魔力炉。

それを組み込んだ女性型アンドロイドは人造魔法少女として怪異と戦う力を得る。

その改造素体としてカタリナに、マスターとして薫に協力を求めたいと。

当然、二人の頭には疑問が浮かぶ。

何故、自分達にそれを頼むのか、戦闘ロボットでも使ったほうがよいのではないかと。

その答えは絶句するものだった。



まず、魔力炉の触媒、動力源として人類には未だ解析が成されていない「魔力」を含んだものが必要らしい。

現在の研究で最も適しているのが男性精液、それも特殊な素質を持つ、恐らくはかつては魔術師や退魔師などと言われていた素質を受け継ぐ男性のものである必要があると。

密かに各診療所で健康診断等に偽装して行われた検査の結果、薫は現在判明している中でかなり上位の素質を持っているらしい。

加えて、魔力炉を組み込む機体も無骨な戦闘用ロボット等では殆ど魔力を行使できない。

魔力行使には感情を持つ疑似人格の起動が必須条件。

さらにできる限り人間女性に近い容姿を保つほど使用できる魔法の効力が増加する。

それが現在判明している事だという。

つまり、魔力炉を使用するには男性精液を受け止める機構に、感情の起伏がある疑似人格、さらに人間女性と変わらぬ容姿を持つロボット、セクサロイドが最適であるという判断だったのだ。

当然、人間に近い姿を保ったままでは強度は脆弱、駆動部の出力も低いままではあるが現状ではそれが最適手段であると。

この時まで自身にセクサロイド機能が備わっていることを薫には秘密にしていたカタリナは、デリカシーもなくそのことを暴露した役人に憤慨するが。

ただ、それでも薫がその条件を受け入れて自身に魔法少女となることを願われれば、受け入れるほかはなかった。

かくして、魔力炉を組み込まれ、改造を受けたカタリナは薫と初夜の「儀式」を経て以降怪異との戦いに身を置いていた。

「ふう……これでおしまい、と」

洗濯物の最後の一枚を竿にかける。

元々、洗濯物は薫と自身の分のみ、然程の数があるわけではない。

ふと、上を見上げれば二階の窓から薫が外を眺めている。

昔は快活な少年だった薫。

だが両親の死以降、笑い顔を見ることはめっきり少なくなった。

十年間、世話をしてきた自身のマスター。

カタリナは薫にメイドロボットとして以上の愛情を抱いていた。

備わっていたセクサロイド機能もやがて時が満ちた時に捧げるつもりであり、だからこそ迂闊に話された時に憤慨したのだが。

今は少しでも彼の望み、怪異を打ち倒すことの力となることがカタリナ
の一番の願い。

その過程で薫に抱かれることと、戦いの高揚感を得ることも大きな喜び
になっていることは否定できなかったが。

ともかく今日はゆっくり薫と過ごそう、この前買っておいたボードゲー
ムでもするのも良い。

なんなら昼間から愛してもらうのもまた……と口角が緩み始めたその時。

薫の持つスマホ、カタリナの視界に同時にアラートが点滅する。怪異が出
現したサインだ。

場所はここからそう遠くない工事現場。

二階から見下ろす薫と視線が合えばカタリナは頷く。

「カタリナさん……！　いくよ！」

「ええ！　よろしくてよ！」

薫がスマホを操作すれば、発せられた信号がカタリナの回路に打ち込ま
れる。

「ん……！　魔力炉、戦闘モード出力……！　はああああっ！」

体を反らせ、小さな叫びをあげた瞬間、カタリナの体内で回路が切り替わ
り腹部の魔力炉が光を放つ。

出力が一般のメイドロイドと変わらぬ値から一気に文字通り桁が違う数
値へと跳ね上がり、身体に張り巡らされたエーテル循環機構が駆動する。

駆け巡るエネルギーの奔流に高揚感と快感を覚えながら、カタリナの身
体が光に包まれていく。

メイド服の形を作っていた光がゆっくりと変化していき。

一瞬閃光が放たれた後、そこに立っていたのは黒いゴシック調のスーツ
と魔女帽子の姿。

「人造魔法少女、カタリナ！　出撃準備完了ですわ！　おーっほっほっ！」

元々、強気な面があるカタリナだったが、変身後は高揚感が増している影
響か、言動が少々変わっている。

当人がそれを意識しているのか不明ではあるが、薫にとっては少々悩ま
しい。

「では、先に現場に向かいますので！　とうっ！」

気合一閃、地面を蹴ればカタリナは宙に舞い上がり、そのまま加速して見
えなくなる。

この状態では認識齟齬の魔法も発動している状態で、近所の人間に見咎
められる心配はないが。

カタリナの消えた方向の空を眺めて小さなため息を付くと、気を取り直したかのように薫は駆け出していった。

煙が上がる改装中の大型ビル。

怪異発生のアラートが発せられたその現場を、カタリナは上空から見下ろす。

こちらは魔力を使ったものではない、純粋に光学機能を強化されたアイカメラをズームモードにして、付近を確認していく。

どうやら避難は完了しているようだ。

人的被害を気にしなくてよいのは助かるが、自己顕示欲が増している彼女にとっては少々残念なことでもある。

さらにズーム倍率を上げて屋上を確認すれば煙に紛れて動く黒い影。

怪異の発生は上部階ということだったがそこから上がってきているのだろう。

詳細を確認しようと意識を集中した時、電子頭脳にアラートが流れる。

次の瞬間、怪異からカタリナに向かって放たれる光弾。

だが、即座に演算された軌道予測から回避、防御共に必要なし、と判断が成される。

予測通り光弾はカタリナの脇を通り過ぎ、彼方で霧散する。

カタリナ的人格モジュールと記憶回路はメイドロボット時代と同様のものだが、CPUは大幅にスペックが高いものに換装されOSは軍用ベースの人造魔法少女専用のもにアップデートされている。

「やれやれ、また雑魚ですかしら？ 折角の休日にこんな相手とは。……まあ、きっちり魔力消費して薫くんにたっぷり補充してもらうのもいいかしら。ではいきますわよ！」

すでに勝利を確信したかのような笑みを浮かべると、カタリナは急降下して屋上に降り立つと怪異達に向かって紫電を放つ。

光弾よりひと回り大きな熱と衝撃波の塊が怪異を貫く。

次々と消滅していく異形の怪物達。

対抗して次々に怪異から光弾が放たれるが、その全てがカタリナの展開した魔力防壁に触れば消滅してく。

カタリナは人間同様の外見を保つため、運動機能や外装強度はほぼメイドロボットとしてのものそのままのものであり戦闘ロボットのような激しい回避、攻撃ができるものではない。

だが、怪異達の攻撃もまた魔力を使用したものであり、出力で大幅に上回

る魔力炉が稼働している限りカタリナの魔力防壁を破ることは叶わない。

加えて彼女の攻撃魔術である雷撃は最大出力で放てば大型の怪異であっても一撃で打ち倒せる。

カタリナは言わば怪異にとっては動きは鈍くとも最強の装甲と火力を備えた重戦車のような存在であり、彼女は改造を受けてから快進撃を続けてきた。

「これで……終わりですわ！」

高らかな宣言と共に振り上げられた杖。

その先端に光が収束すると同時に射出される雷撃。

それは的確に怪異の核を打ち抜き、その存在を崩壊させていく。

「さて。うん。そこそこ魔力も消費できましたし。これは薫くんに補充をお願いしてもよい頃合いかしら？」

昨日の夜、薫の就寝前に「補充」してもらった液はまだカタリナの腹部、魔力炉内に残っている。

愛おしそうに魔力炉が収められている腹部を撫でると、彼女は薫のスマホの位置情報を確認する。

GPSの座標はカタリナの現在位置とほぼ一致。

つまりはこのビルにたどり着いて登っている最中だろうか。

「もう片付きましたし、急いでこなくても良いのだけど。……あ。しばらくは無人でしょうし。ここで補給してもらうのもいいかしら。……あら？」

端正な顔が崩れてニヤけた時、再度電子頭脳にアラートが流れる。

「もう一体、ですわね」

構えを取り直し、次の怪異を待ち受ける。

が、いつまでたっても追加の攻撃は来ない。

「ん？ もういない？」

再度センサーを起動しても周囲に怪異の反応はない。

「……逃げたんですの？ まあそれならそれで……ん？」

そこでカタリナは異常に気付く。

視界の隅に転がる、作業用のロボット。

人間と同じく四肢は備えているが、2m以上の体躯を持つ外見も重機めいたもの。

それが不自然にびく、びく、と動いている。

そして、怪異反応はそのロボットから発せられている。

「これは……？ 一体どういう……？」

怪訝に眉をひそめるカタリナに應えるかのように、操り人形めいた不自

然な動きで立ち上がるロボット。

虚をつかれた彼女が反応する前に、身をかがめたロボットが一気に間合いを詰め、そのハンマーのような右腕を振りかぶる。

咄嗟にカタリナは手を構え、魔力防壁を展開するが。

ロボットの腕は、薄く光を放った防壁をすり抜けカタリナに迫る。

「なっ!？」

今までの怪異の攻撃は自らの身体での攻撃か、光弾のようなものしかなかった。

それらは言わば魔力の塊であり、魔力防壁はそれを防ぐための術であったが。

怪異が取り憑いた状態のロボット、その攻撃は魔力防壁をすり抜ける。

慌てて後ろに飛びのき距離を取る。

だがその刹那。ロボットから放たれた蹴りが胸を捉え、カタリナは横転する。

「がっ! ぴ、がきゅがびぁああっ! ? ……このっ! う、あ……か、かか、快楽中枢回路が確認できま、快楽中枢かイ R が接続さレま、接続が確認……う、や、やば……っ! 回路がはずれかけて……あ、ひ、ぴきゅううんっ! ?」

転がった勢いで起き上がり、杖を構えるが。

左胸の乳房の中、衝撃で破損した回路が外れかけているのか、数秒ごとに取り外しと接続が繰り返されているような状態となってしまう。

しかもその回路はカタリナの性的機能を司る快楽中枢回路。

繰り返される接続動作の度、ノイズの混じった快楽信号が電子頭脳に流れ込み処理領域を侵していく。

元々、カタリナの運動機能は家庭用アンドロイドと大差はない。

加えてこの状態では次の攻撃を避けきるのは到底無理と言わざるを得ない。

「こ、この……! よくもっ!」

体中へ走るノイズ、その衝撃に人格モジュールは顔面へ苦痛を浮かばせてしまう。

だが、その時視界の隅に映るローターを備えた飛行ドローン。

おそらく報道用の撮影機だろう。

この戦闘も中継されている、そのことを認識するとカタリナは表情の制御を取り戻して少し引きつった笑顔を浮かべ立ち上がる。

「おーほっほっ! 少しはやるようですわね! でも、このカタリナの敵で

はありませんわ！ ……びゅ、ぎ、きゅいっ！？」

自身が人々の希望になっている、その事が彼女の誇りでもあった。

なれば、無様な姿をさらすわけにはいかない。

立ち上がった振動で胸の回路からはさらにノイズが流れ込み、僅かに口から異音が漏れるがそれも押し殺し、足の制御に処理領域を回して震える足を押し止める。

頭蓋内部では戦闘用のシステムが演算を繰り返し状況を打破する術を模索する。

だが、その隙を与えまいとするのかロボットは身をかがめると猛然とカタリナに向かって突撃を繰り返す。

もう一度、まともに攻撃を食らってしまえばカタリナは完全に破壊されるだろう。

この状況では攻撃の回避はほぼ不可能。

電撃魔法を撃てるのももう一発が限度。

確実に仕留めるには。

報道ドローンが見守る中、勢いを増したロボットがカタリナに激突する直前。

突如、大きな土煙が弾けてカタリナとロボットを包み込む。

一瞬、静寂に包まれた屋上。

十秒程経過して煙が徐々に晴れていくと。

そこには屋上のコンクリートがえぐれ、そこから発した瓦礫に包まれて拘束されたロボットの姿があった。

「ぶっつけ本番でしたがさすが私！ うまくいきましたわね！」

カタリナが飛行しているのは揚力を得ているのではなく、魔法による念動力で自身を持ち上げている。

それを応用し脆くなっていたコンクリートを破砕、落とし穴のようにしてロボットを拘束したのだった。

何が起きたのか理解できない様子でもがき続けるロボット。

その頭部カバーの端が外れ、黒いモヤのような怪異本体が見え隠れしている。

「そこですわね……滅びなさいまし！」

今度こそ勝ち誇った笑みを浮かべたカタリナが杖を一閃し。

進った紫電がロボットの頭部を貫くと、断末魔のごとく数回もがいた後、ロボットは完全に動きを停止した。

機体が力を失い、崩れ落ちたのを確認すればカタリナは腰に手を当てド

ローンに向かってポーズを取る。

「おーっほっほっ！ すす少しばかりでテ手こずりはしましたが、さ最後ははあっけなかったでですわね！ このカタリナなの勝利ですわ！ ごご安心くださいいなな！」

言語機能の異常は完全には隠せないものの、高笑いをあげながらの勝利宣言。

普段であれば余裕と高揚感に満ちた状態であったが、もはや今のカタリナは立っているだけでも精一杯。

左乳房の中は外れかけた回路がショートを繰り返しているばかりか燃料の精液は枯渇寸前。

引き上げられた性欲値と、壊れかけた快楽中枢回路に電子頭脳は凄まじい勢いでエラーを連発している。

各部の不調アイコンとエラーメッセージで視界が埋まる中、カタリナは必死に人格モジュールの演算領域を確保し四肢の制御を行って。

「そ、それでは、皆様。ごきげんよ、う。ぴゅ、ぎ。お、ほほ、ほほほ……がびっ！」

このダメージでは飛行することは叶わず、振り向いたカタリナはなんとか平静を装ってゆっくりと歩いていく。

ドローンの視界から逃れるように屋上へと繋がる非常階段を降り、扉を開けビルの中に入っていく。

ゆっくりと扉を閉じてドローンのカメラから完全に逃れたことを確認する。

「ぴ、ぎゅ……！ か、快楽中枢回路のせつぞく、をを、せ、せつぞ……あ。も、だめ……たす、けて……かお、r、く……がびーー！？？」

その途端、カタリナの表情から笑みが消えてぱたりと仰向けに倒れて痙攣を繰り返し始めた。

薫は息を切らせて現場のビルの階段を登り続けていた。

その最中、流れてくるネットニュースの中継と、カタリナ自身から送られてくるステータス情報から概ねの状況は理解できていた。

タブレットに表示される情報が確かなら、今のカタリナは機能していることが奇跡なほどのダメージを受けているはずだ。

「カタリナさん……カタリナさん……！」

面と向かって口にしたことこそないが薫にとってもカタリナは掛け替えのない家族、最愛の女性だった。

幼い頃から共に過ごした姉であり母であり友人であり恋人。

自らの願いでそんな大切な存在の彼女を、魔法少女という両親を奪った怪異への復讐の道具としたことに後ろめたさを感じてはいた。

そして今、実際にカタリナは傷ついてしまった。

だがともかく後悔よりもカタリナのもとへ駆けつけることが先決だと自分に言い聞かせて走り続ける。

「はあ、はあ……！」

ようやくたどり着いた上層階、タブレットに示されるカタリナの現在位置はすぐそこ、曲がり角の先。

「カタリナさ……あ、あっ……！」

そこにあったのは、虚ろな表情で倒れて四肢を痙攣させるカタリナの姿だった。

だらしなく開いた口からは洗淨液が垂れ、リップシンクとずれた小さな喘ぎと耳障りなノイズが漏れ続けている。

明らかに故障したその姿を見て、薫は思わず立ちすくんでしまった。

「ぴ、きゅい……か、おルク……がぴがっ！？ か、かか、快樂中枢回路が認識できま。新規接続をかくに。取り外されまし、きゅ、い、あが、ががががびゅぎがっ！？」

焦点の定まらぬアイカメラが収縮を繰り返しながら薫の顔を捉えるが、上体を起こそうとした途端左胸から異音を発して激しく痙攣する。

その姿に焦りと後悔を感じながらも、少年は別の感情で鼓動が早くなる事を抑えられずにいた。

「カタリナさん……！」

息を荒くしながら薫は異音の発生源、メンテハッチを開くため彼女の胸元に手をかけ乳房を露出させる。

ふるん、と揺れて現れた双丘は今までに見たことがないほど、今にも破裂してしまうのではないかと思うほどに張り詰めていた。

勃起しきって固く尖った左乳首のスイッチを回せば、ロックが外れてメンテナンスハッチが開こうとするが。

「ぴゅ、ぎいいいんっ♡ めめ、めんてなンすはっちおおおーぶぶぶがぴいいっ！ ははハッチ開閉機構に異常がかくにんされされされあああかかかおるくくく、ひひ、ひらかない、ひらかないのおおっ♡ あ。あ。あ……びゅぎいいいいーっ♡」

ダメージで何処かが歪んでいたのか、なかなか開こうとしなかった左乳房が何度か軋んだ後にぱくんと跳ねる。

途端に内部へ立ち込めていた煙が吹き出してしまう。

その様子に薫はダメージの深さを心配するが。その内部はさらにひどい有り様だった。

「こ、これは……こんなに壊れて……！」

衝撃を受けたせいでカタリナの快樂中枢回路は基盤を固定する金具が外れ、配線のみでぶら下がっている状態。

元々電子頭脳と神経系に直結されている快樂中枢回路、それがこんな状態で戦闘を続けていたとは。

ともかく、応急修理だけでもしたいところだがあいにく工具も部品も手元にない。

「仕方ない……酷い処置だけど……」

呟きながら手持ちのテープで回路を仮止めする。

これだけでも今よりはマシだろう。

回路部品に触れないよう、基盤の端を金具にテープで幾度も巻いて外れないよう固定する。

その状態で乳房を閉めてカタリナを床に横たえる。

僅かばかり、反応がおとなしくなったカタリナだがこの状態でも回路の損傷は抑えられない。

救難信号を送れば程なく回収部隊が送られてくる。

それまで電源を落としておいたほうが良いだろう、そう思ってもう一度乳房を開こうと思った時。

「ん……薫く、ぴ、きゅう。ええエラー FG9619 が発生ししs。魔力炉出力低下。性欲値がじょうしょう、しし。ん、あ……はあ、はあ……♡」

言葉の端々にノイズを混じらせながらも時折交じる艶めかしい呟きに薫の鼓動はさらに早くなる。

アンドロイドのカタリナを恋愛対象として受け入れている薫にとっては、負荷が高まった時に発するノイズはある意味彼女自身の激しい喘ぎのように感じられていた。

それが今まで聞いたことのないほど激しくなれば。

「ぴ、きゅ。……マスター：池波薫の性的興奮を確認、し。勃起ししして。せせ、性欲値が上昇、し、し……♡ ぴゅ、い、きゅいん」

気がつけば状態を起こしたカタリナが爛々と輝く眼で盛り上がった薫のズボンを見つめている。

その様子にぞくりと背筋が凍るような感覚を覚える薫だったが。

「カタリナ、さん……？ わあああっ！」



がばり、と身を起こしたカタリナはそのまま薫の上に馬乗りになって、少年を仰向けに押し倒した。

「え、ちょ……！？ ま、待ってカタリナさん！ お、落ち着いて……」

慌てて引きはがそうとするが、戦闘用には劣る力とはいえ相手はアンドロイド。

全開の膂力に少年がかなうはずもなく。

なんとか上半身だけを起こして、馬乗りになるカタリナを見上げる形となる。

その瞳の輝きに思わず薫は息をのんだ。

「がび。ま、魔力炉出力低下、人格モジュール稼働率が低下：10.81％％％。燃料残量が不足、しし。精液の補給を要請しし、しま。しま。ま、ま、ますたー。すき♡すき♡すき♡ せ、性欲、じょ、上昇……んああああっ♡」

もう我慢できない、というようにカタリナは帽子のみを残して衣服を脱ぎ捨てる。

きゅいん、かば、きゅいん、かば、と小さな駆動音と共に女性器ユニットの入口は小さく開閉を繰り返し、その度に潤滑液が排出されて薫の服へ垂れていく。その状態のカタリナの股間が少年の股座へ押し付けられ、ぐいぐいと押し込まれる。

「ひうっ！ あ、あうっ……！？」

布越しの刺激にびくん、と背を反らして反応する薫。

「か、カタリナさん……だめ、だよお……ひああ……」

小さく、か細い悲鳴をあげる薫だが。

その声を聴音センサーで捉えた時、一瞬カタリナの顔に恍惚とした笑みが浮かんで。

「びゅ、い、がびいいいっ♡ かか、かわいい。かわいい。ますたーはかわいいを認識しししここ興奮度が上昇してしてして人格モジュール動作がふあんでいでででささ再起動再起動ををを感情処理に失敗しましたせせ性欲値が上昇しま現在値が 541.119191 ばばば％％％上昇中たた直ちに性交をかいししてくださいささ重大なえらーがびいいいいーっ♡」

ぎゅい、と音を立てて開いたままになった女性器ユニットから潤滑液が止めどもなく吹き出してくる。

完全に性欲のみに支配されたロボットにはもはや人類の希望の誇りも威厳も欠片はなく。

「せせ、せっくす。せっくす。かか、カタリナはせっくすろぼとです。ま、ますたー、かかかおるくくく、せっくすしまししょう。当機体 MGA ー

T1691 - 01M はますたーに最高のかいらくを提供いたしままがびいいいーっ♡」

淫靡な雌口ロボットと化したカタリナは頬の端を痙攣させつつも妖艶な笑みを浮かべると、引きちぎるかのように少年のズボンを引きずりおろし。

「ま、ますたーの精液を当機にちゅちゅちゅうにゅうしてくだささい。そのままのたいせいをいじしてください。かか、かたりなにおまかせくださいまし。MGA - T1691 - 01M はますたーをあいしています愛情度がじょうしょうしていますすすすきすきでますたああっ♡ かかかたりなはがまんができませんせせせっくすを実行しししますびいいいーっ♡」

虚ろな笑みを浮かべたまま、カタリナは薫の股間に自身の女性器ユニットを押し当てると、そのまま一気に腰を落として少年のものを飲み込んだ。「ひぐあっ！ あ、あううっ！ カタリナ、さ……っ！」

同時にきゅいんという音と共に強烈な締めりと、ぬるりと濡れた感触が薫のものを包み込む。

潤滑液まみれの女性器ユニットはその柔らかな人造の肉壁で少年のものを舐め回し、圧迫して射精を促し始める。

カタリナ自身は恍惚とした表情でまたがったまま、身動きをしない。

だが、その内部ではかしゅん、かしゅん、とユニット自身がピストンのごとく上下動を繰り返し、腰を振る以上の激しい攻めを続けてくる。

その快楽に耐えるように歯を食いしばって堪える少年だったが、カタリナはお構いなしに動作スピードを上昇させていく。

「びゅい、びゅい！ MGA-T1691-01M は正常動作中でできもちいいですますたーの勃起率が上昇していままがびいいいーっ♡」

ぶるん、ぶるんと少年の視界一杯に双丘が揺れる。

一刻前まで戦場であった場所から僅かに隔てたこの場所で繰り返される淫らな行為。

だがそれはカタリナにとって至上の悦びとなり、更なる快楽を求め続ける。

「びゅいっ！ きもちいいっ！ MGA-T1691-01M はかか快楽中枢回路に過電流を検知していままがびびがきゅううんっ♡」

さらなる快楽を求めてカタリナが腰を振り始めると左乳房から音が響く。

先ほどの応急修理ともいえない処置の快楽中枢回路が外れかかっているのだろう。

しかし、思考能力が低下したカタリナはお構いなしに動きの激しさを増していく。

「がび、きゅい♡ ますたー。すき。すき。すき。もっときもちよ、く……が
びっ！？ 快楽中枢回路に異常がががあばばびゃあああっ♡ あーっ
♡ あーっ♡ かか快楽中枢回路の接続が異常でで接続されまし異常
ででセセ接続をかくにんししししがびーっ！？ かか、快楽
中枢回路温度が異常ででめめめんでなんすはっちをかいはうししし重大
なそんしょうのおそれががががひぎいいいいーっ！？ こわれるう
ううーっ♡」

髪を振り乱し悶えるカタリナ。

朦朧としながらも薫が左乳首のスイッチを捻れば、ぱん、と弾け飛ぶよう
に乳房が開いていく。

熱気とともに完全に金具から外れた快楽中枢回路がケーブルでぶら下
がって振り回される。

回路が揺れて、繊細なケーブルが一本、一本とちぎれていけばその度に凄
まじいノイズが電子頭脳に流れ込んで。

「ぴゅぎゃああーっ♡ かか、かいらく、ちゅちゅちゅすかかいろろ
ろろせせ接続ひぎいいいいーっ！？ かか快楽信号がいじょうで
でぜぜ絶頂しま絶頂ぜぜ絶頂ぜっちょ処理領域がありませせせ絶頂処理に
しっぱい絶頂ぜぜっちょちょちょがびーっ♡」

女性器ユニットは自壊寸前の勢いで唸りを上げてピストン運動を繰り返
し、潤滑液を撒き散らす。

完全に壊れたセックスロボットと化したカタリナは全身をがくがくと震
わせ、もはや自意識も怪しい状態で腰を振って快楽を求める。

「かた、りな……さ……も……ぼく……あ、あ、あ……あーっ！！」

カタリナの絶頂とともに何度も遅い来る締め上げに気も狂いそうな快楽
に少年のペニスは一瞬、縮み上がると次の瞬間大量の白濁液、魔力の塊をカ
タリナの魔力炉へ打ち込めば。

停止寸前だった魔力炉はまばゆい光を放って一気に最大出力で稼働する
が。

「が、ぴ、きゅいいいいっ♡ しゃ、しゃしゃせいをかくにんまりよくろ
にせいえきがじゅうてんされ、され……がびーっ！？ 出力制御
に以上がははっせいしましま供給電圧がいじょうでででかか快楽中枢
回路にちめいてきなそんしょうがががええらーえらーえらー致命的な
そんしょうがはっせいしししあががががきゅいんきゅいんがびーっ
♡ ここ、こわれる、こわれる、こわれるうううーっ♡ かおる、く

うんっ♡ かりな、きもち、いい、のおおおーっ♡ こ・わ・れ・るうーっ！ がびーっ♡♡」

がくがくと痙攣する中、胸からは激しい火花が吹き出し、ヘソや耳からも煙が上がる。

全身の回路が異常な電圧の電流でショートを繰り返して。

体中から警告音と煙を断続的に吹き出して悶えつづけるカタリナ。

数十秒間、痙攣を続けた後、快樂中枢回路を支えていた最後のケーブルが千切れれば、ごとんと音を立てて基盤が転げ落ち。

すでに気を失っている薫の上に覆いかぶさりながら、残骸寸前の姿となったカタリナは完全に機能を停止した。

『おーっほっほっ！ 少しばかり手こずりはしましたが、最後はあっけなかったですわね！ このカタリナの勝利ですわ！ ご安心くださいな！』

池波家の居間、ニュース番組で映し出されるカタリナの姿。

一週間前、戦闘後に激しいセックスで大破する前の映像だ。

「……ほんと。この後ドローンが撮影で追ってこなくてよかったね」

この直後の出来事を思い出せば薫の身が震える。

「……うう。本当に面目ありませんわ……。私としたことが」

「もういいよ。ちゃんと修理してもらえたんだし」

回収されたカタリナは数日間をかけて完全に修復されたが二人の記憶まで消えたわけではない。

薫はカタリナを戦闘させていること、カタリナは愛する少年を襲ってしまったも同然なこと。

互いに後ろめたさを抱えた二人は、修理完了後も魔力補給を行っていない。

カタリナは破損時に注入された残りの魔力で動いている状態だった。

彼女としても性欲上昇がエラーを起こし始める頃合い。

何よりこの状態では変身も叶わず、戦いに赴くことは出来ない。

そろそろお願いをするべきだろうか、でもあんなことの後では、そう思いながら薫が座るソファの横に立ち尽くすカタリナだったが。

「……カタリナさん。そろそろ……僕、したい」

「え、し、したいって……」

「セックス。魔力補給……もうだいぶたまってきちゃったから……カタリナさんは嫌？」

少しはにかみながら頬を染める薫。

カタリナの記憶が正しければ彼が自ら求めてくれたのは始めてだった。
「い、嫌なわけがないでしょうに！ で、では。失礼して……っ！」
下着を脱ぎ捨てるとそのままスカートで覆いかぶさるように薫の上にまたがるカタリナ。
罪悪感も吹き飛んだカタリナは幸せに満ちた笑顔で唇を重ねれば、興奮度が上昇してスカートの中から女性器ユニットの駆動音が漏れ始める。
そのままカタリナはソファに愛しい主人を押し倒し、唇を重ね合わせる。
互いの後ろめたさを隠しながら少年とアンドロイドは愛を交わし始めて。
だが今この瞬間、二人が幸福と快樂に包まれていることは事実だった。